

気分一致効果研究における方法論上の問題

伊 藤 美 加

Some Methodological Issues on the Mood-congruent Effect

ITOHI Mika

はじめに

人間の情報処理過程において感情は重要な位置を占める。感情というテーマは心理学にとって非常に重要な研究領域と指摘されながら、感情に関する心理学的研究は「複雑である」、「操作できない」、「主観的にすぎない」等の理由で方法論上困難であるとされ、そのため主要な研究領域とされてこなかった。しかし1980年代以降、認知と感情との関係に関する多くの認知心理学的研究が行われ、新たな知見が見られるようになった。感情が認知に及ぼす影響のひとつに、気分一致効果 (mood-congruent effect; e.g., Bower, 1981) がある。特定の (例; 楽しい) 気分が生起するとその気分と一致する感情価 (affective valence) を持つ (例; 好ましい) 刺激の記憶や判断が促進される現象を指す。本稿は知覚や記憶、社会的判断における気分一致効果を巡る問題について取り上げる。気分一致効果は認知と感情とに関する研究においてしばしば観察される感情の基本的な効果と考えられており、こうした効果の検討によって、感情を含めた人間の情報処理過程の解明に有用な知見が得られると期待される。従って気分一致効果研究は、より一般的な認知と感情に関するモデルの修正あるいは今後の新たなモデルの作成に重要となりうるであろう。

本稿でははじめに気分一致効果研究を概観する。典型的なパラダイム及び代表的研究例を示し、どのような手続きで気分一致効果が検討されてきたかをみる。次に知覚、記憶、判断過程に及ぼす多様な気分の影響を取り上げ¹、近年の研究動向を紹介する²。それらの研究の蓄積にあたって再考すべき方法論上の問題点を上げ、最後に今後の検討すべき課題を指摘し結びとしたい。その前に用語の定義について述べよう。

人間の情報処理における知覚、記憶、判断等の知的側面を「認知 (cognition)」と定義する。快、不快等の情的側面を「感情 (affect)」とする。「気分 (mood)」は、良い気分とか悪い気分といった漠然としたものであり、気分を喚起した対象が不明確で、一定時間持続する比較的穏やかな感情状態とする。気分は日常頻繁に観察され、実験室においても容易に喚起できる感情であり、主にポジティブな (例; 楽しい、高揚した) 気分とネガティブな (例; 悲しい、憂鬱な) 気分とが扱われる。これに対して、「情動 (emotion)」は、怒りや恐れのような強い生

理的喚起をはっきりと自覚できるものであり、気分よりも強度が強く、明確な対象によって喚起される一時的な感情状態を表す。「感情」は、気分と情動を含む最も包括的な概念とする。

気分一致効果研究

気分一致効果の操作的な定義として、特定の気分の時にその気分と一致した感情価を持つ刺激の認知が、一致しない感情価を持つ刺激の認知よりも促進されるという気分誘導群内の差（例；ポジティブな気分の被験者が、ポジティブな情報をネガティブな情報よりも処理しやすい）と、一致しない気分の時よりも促進されるという気分誘導群間の差（例；ポジティブな気分の被験者が、ポジティブな情報をネガティブな気分の被験者よりも処理しやすい）とがある。どちらの定義に従っているかは諸研究間で異なることがある。しかし誘導気分の効果を検討する以上、少なくとも後者が認められることを気分一致効果の生起基準とするべきであろう。なぜなら、気分誘導群と統制群とを比較することによって、処理する情報の内容の相対的な偏りが誘導された気分によって生じるのかを検討できるからである。

知覚研究では、特定の気分と一致する情報に選択的に注意が向くとされる（e.g., MacLeod & Rutherford, 1992）。例えば、気分が良いときは気分が悪いときよりもポジティブな感情価を持つ単語の同定が速い。記憶研究では、気分と一致した情報が符号化あるいは検索されやすいとされる（e.g., Bower, 1981）。例えば、気分が良いときは気分が悪いときよりもポジティブな内容の情報をよく覚えていたり、ポジティブな出来事ばかりを想起したりする。印象形成や対人評価等の社会的判断研究では、気分が記憶以外の認知に及ぼす影響を評定や反応時間を指標にして検討しており、特定の気分の方向に評価や判断が偏るとされる（e.g., Forgas, Bower, & Kranz, 1984）。例えば、気分が良いときは気分が悪いときよりも対人評価判断で相手を否定的に評価する。知覚における気分一致効果は気分一致知覚、記憶における気分一致効果は気分一致記憶、判断における気分一致効果は気分一致判断と呼ぶ。特定の気分と一致する特定の知覚や記憶、判断の意ではなく、気分一致効果の下位分類として用いる。

符号化時における気分一致記憶の実験パラダイムをFigure 1に示す。手続きとして、ポジティブもしくはネガティブな気分を操作する段階、特定の感情価を持つ情報を学習する段階、それを想起するテスト段階の3段階がある。基本的には記憶以外の課題の場合でもほぼ同様の手続きがとられる。その際のアレンジは研究によって異なり、学習課題と再生課題間にフィラー課題を課したり、遅延が置かれたり、また各段階間で気分操作をチェックするための気分評定課題を複数設けたりする。それぞれFigure 1の(a)は実験前の状態を査定するため、(b)は気分操作が有効かをみるため、(c)は気分が維持されているかを確認するため、(d)は最終確認のためである。なお、気分評定は全て行うことはまれで、必要に応じて行われることが多い。なぜなら被験者に繰り返し気分評定を行わせることによって、実験意図を悟らせ要求特性をもたらす可能性があるため、慎重に行う必要がある。ポジティブな気分の被験者がポジティブな情報を、ネガティブな気分の被験者がネガティブな情報をそれぞれよく記憶していた場合、気分一致記憶が認められたとみなされる。操作された気分と情報の感情価の種類の交互作用として、

Figure 2 のような典型的結果が得られる。

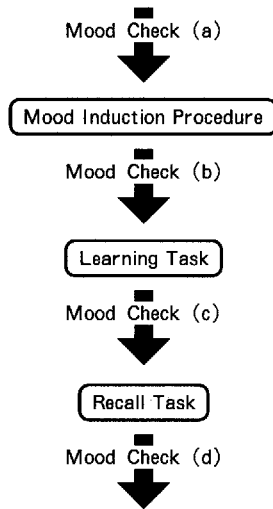


Figure 1 符号化時における気分一致記憶の実験パラダイム

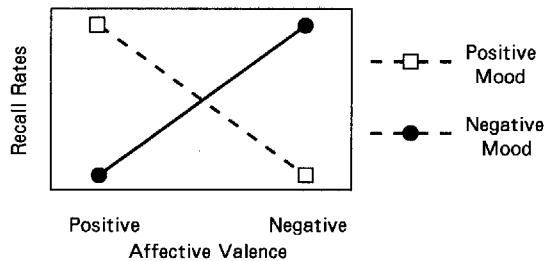


Figure 2 気分一致記憶の概念図

知覚、記憶、社会的判断に及ぼす気分一致効果を同時に検討した代表的な研究例を紹介する。Forgas & Bower (1987) は、被験者にパーソナリティテストを実施し、その結果の良否について偽のフィードバックを行うことで気分誘導を行った。良い結果を知らされた被験者はポジティブな気分になり、悪い結果を知らされた被験者はネガティブな気分になる。被験者は、ある仮想人物に関する望ましい行動と望ましくない行動を記述した文章を幾つか混ぜたリストを読み、各人物の印象を形成するよう求められた。被験者は、呈示された記述文を1文読んで理解できたら、キーを押して次の文へ進むよう指示された。

被験者が各記述文を読解するのに要した時間を測定した結果、ポジティブな気分の被験者は、望ましい行動文より望ましくない行動文により多くの読解時間をかけていた。逆に、ネガティブな気分の被験者は、望ましくない行動文により多くの時間を費やしていた。つまり、気分一致する内容を持つ情報により選択的に注意が向けられており、気分一致知覚が認められた。呈示された記述文の再認テストと再生テストでは、いずれもポジティブな気分の被験者は望ま

しい行動を、ネガティブな気分の被験者は望ましくない行動をより多く記憶しており、気分一致記憶が認められた。印象判断と判断に要した時間をみると、ポジティブな気分の被験者は好意的な評価をする傾向が強く、しかも好ましい評定を行うのに要する時間は好ましくない評定を行う時間に比べて短かった。逆にネガティブな気分の被験者は非好意的な評価をする傾向が見られた。気分一致する方向に印象形成が行われやすいことが示され、気分一致判断が認められた。

その後、気分操作の仕方、刺激材料、認知課題や測度に、様々な手続きが工夫され、気分一致効果の追試が行われており、日常場面でも実験室でも生起する一般的な現象とされている (Blaney, 1986)。近年の研究動向は、気分と刺激材料の感情価との単なる一致性に関する議論から、気分一致効果の生起要因や生起メカニズムの特定に関心が移行しつつある。前者は気分一致性が認められるか、気分の影響の有無を検討するのに対し、後者は多様な気分の影響を質的に検討し、気分が果たしている多面的な役割とその適応の意味とを深く探求しようとする立場である。感情と認知との関係が多様で複雑な様相を呈するのは、感情が処理される情報の内容だけに影響するのではなく、情報処理過程にも影響するからではないかと考えられるようになってきた (池上, 1998)。以下に知覚、記憶、判断課題における気分の影響に関する研究をそれぞれ概観して見ると、多様な気分の影響を示す様々な知見が報告されていることがわかる。

知覚における気分の効果

知覚同定、語彙決定、情動ストロープ課題等、同じ認知課題においてもあまり結果が一貫しないことが多い (e.g., Gotlib & McCann, 1984; MacLeod & Rutherford, 1992)。これは操作された気分と刺激材料とが持つ感情価の食い違いに依存するためと指摘されている。多くの場合、気分状態と処理される情報との感情的な一致性は一次元でのみ定義されている。つまり感情的にポジティブかネガティブかで分類されており、必ずしも同じ種類の感情ではない。例えばネガティブな気分には、悲しみも不安・抑鬱も含まれるが、それらが同じように影響を及ぼすのではなく、ある知覚的処理に特定のに影響すると考えられる。例えば Niedenthal & Setterland (1994) や Niedenthal, Halberstadt, & Setterlund (1997) は、“happy”や“sad”気分誘導群は広義のポジティブ語やネガティブ語ではなく、“happy”や“sad”に関する語で気分一致知覚を見出した。情報処理の初期段階である知覚過程では、入力情報をリアルタイムに受け入れる前注意的処理が行われるため、多様な感情の特定性 (specificity) がより重要な要因であることが分かっている。今後はより細分化された感情がもたらす影響に関する研究や、それが担う特殊な機能を明らかにすることが期待されるであろう。

記憶における気分の効果

符号化時や検索時における気分状態と記銘材料との感情価の一致性を示した気分一致記憶研究は多いが、検索時ではなく符号化時の気分状態のみの効果を報告するもの (Bower & Mayer, 1985)、全く効果が見られないものや (Gayle, 1997; Kwiatkowski & Parkinson, 1994)、逆に不一致性 (incongruency) を示したものもある。例えば、Rinck, Glowalla & Schneider (1992)

は、符号化時に誘導した気分が、感情価の強さの異なる刺激語の記憶に及ぼす影響を検討した。その結果、強い感情語では気分一致記憶が見られたのに対して、弱い感情語では気分不一致記憶が見られた。またParrot & Sabin (1990) は、検索時に気分を誘導し、被験者に自伝的記憶を想起させた。自然な気分誘導(天候、音楽)を行った場合は気分不一致記憶が見られたが、人工的な気分誘導(音楽と文章呈示)を行った場合に気分一致記憶が見られた。

またポジティブな気分とネガティブな気分とでは、その効果が異なり非対称性(asymmetry)を示すことが指摘されている(Isen, Shalke, Clark, & Karp, 1978; 伊藤, 1998)。Isen et al. (1978) は、ゲームに勝ったことによるポジティブな気分の影響がポジティブ語の想起を促すのに対し、ゲームに負けたために生じたネガティブな気分がネガティブ語の想起を促進するわけではないことを確認した。このようにポジティブな気分の場合は比較的一貫して気分一致効果が得られるのに対して、ネガティブな気分の場合は結果が必ずしも一貫していないのは、ポジティブな記憶表象とネガティブな記憶表象とでは質的に異なるためであることや、ネガティブな気分をできるだけ低減緩和しようとする動機付けられ、その影響が調整されるためであるとされる(Isen, 1987)。

更に自己関連符号化手続き(self-reference encoding processing)を用いた場合により気分の効果が得られやすいという報告もある(Brown & Taylor, 1986; 伊藤, 印刷中; 筒井, 1997a, 1997b)。筒井(1997b)は、自己関連判断と他者関連判断における気分一致記憶を検討した。自分にあてはまるか否かを判断する自己関連判断を行わせた場合では、自己に関連すると判断した語においてポジティブな気分でもネガティブな気分でも気分一致記憶が認められた。一方母親にあてはまるか否かを判断する他者関連判断では、ポジティブな気分でのみ認められ、気分の効果の非対称性を示した。気分そのものが気分一致効果の原因というよりも、利用される記憶表象や符号化時の精緻化が気分一致効果と強く関わっていることが分かっており、近年は様々な要因の関与やその生起メカニズムに焦点が当てられている(e.g., 伊藤, 1999a, 1999c; Nasby, 1994, 1996)。

判断における気分の効果

ポジティブな気分するときには判断対象に対し肯定的な評価を行い、ネガティブな気分するときには否定的な評価を行いやすいというように、気分と一致した方向に判断が偏るといふ現象は、評価判断だけでなく様々な社会的判断や社会的行動でも広く認められている。このような判断に及ぼす気分の効果は、被験者にその気分の原因についての情報を与えることにより、なくすることができることが知られている。Schwarz & Clore (1983) は、天候に付随する気分状態が日常生活全体についての満足度判断に及ぼす影響を調べた。晴れた日は雨の日よりも、被験者の気分も良く、評価判断も良かった。しかし判断の前に天候に言及することによって、気分と天候の関係に被験者の注意を向けさせた場合、気分評定に対しては依然として効果があるが、判断に及ぼす効果がなくなった。

また判断における気分一致効果は、特にネガティブな気分よりもポジティブ気分でもより一貫して得られるという、気分の効果の非対称性を示すことが多い。これは判断に含まれる様々な

要因によって気分の影響が調整されるため、あるいは、ポジティブ気分とネガティブ気分とが判断に及ぼす影響が異なるためとされる。近年ではポジティブな感情とネガティブな感情が情報処理過程において果たしている機能的役割の非対称性に焦点が当てられ、感情と規定される情報処理方略との関係に関する研究がある (Forgas, 1995; Schwarz, 1990)。詳細は池上 (1997, 1998) に詳しい。

気分一致効果研究における方法論上の問題と今後の検討課題

気分一致効果は感情と認知に関する研究に広く当てはめられ、多種多様な実験的検討が展開されているものの、その妥当性の問題が残されている。引き続きこうした多様な気分の効果を詳細に検討するにあたり、その方法論上の問題を再考し、実施に当たり何に注意を払うべきかを把握する必要があると考えられる。そこで気分操作、認知課題遂行に関わる手続きにおける問題点やその注意点を指摘した後、今後考慮すべき様々な課題について論じる。

気分操作 (mood manipulation)

特定の気分が認知過程に及ぼす影響を調べるためには、独立変数となる気分を操作する方法が必要である。一般に気分を操作する方法は、実験的な気分誘導法と気分の個人差を基にした方法とがある。因果関係を特定できる利点があるため、できるだけ多くの被験者に共通する特定の内的状態を生み出す手続きとして、様々な気分誘導 (mood induction) 方法が工夫されてきた。例えば、Velten法 (Velten, 1968)、催眠 (Bower, Gilligan, & Monteiro, 1981)、偽の成功/失敗フィードバック (Isen et al., 1978)、自伝的記憶想起 (伊藤, 1999b)、ビデオ映像 (Gross & Levenson, 1995)、表情 (Laird, Cuniff, Sheeman, Schlman, & Strum, 1991)、匂い (Ehrlichman & Halpen, 1988)、音楽聴取 (Clark & Teasdale, 1985)、これらを組み合わせたもの (e.g., 筒井, 1997a) もある³。日常でもこれらの材料によって特定の気分の喚起が生じることはよくあるであろう。ただし同じ誘導法をとれば必ず同じ内的状態になるとは限らない。実験状況によって内的状態が影響されるためである。どのような文脈で生じた気分なのか、常に注意が必要であろう。

実施にあたり様々な問題がある。まず気分誘導法の選択の問題として、誘導気分の持続時間、強度、誘導成功率が各気分誘導法で異なる。Velten法は誘導される気分が比較的強いものの、その持続時間は比較的短く、また誘導成功率も低い。それに対して音楽は連続して聴取できるため誘導気分の持続時間は長いものの、誘導される気分は弱く、更に個人差が認められることもある。また従属変数との交絡について考慮する必要がある。例えば自伝的記憶想起に及ぼす気分の影響を検討する際に、自伝的記憶想起による気分誘導は望ましくない。言語材料を用いる認知課題を行う場合は非言語による誘導法の方が干渉は少ない。その意味で気分誘導に被験者の余計な心的努力を投資させない方法として、聴覚や嗅覚による気分誘導は有効と言えるが、研究内容にあわせて誘導方法を決定すべきであろう。次に気分誘導時の教示の問題として、実験目的を知らせるか、気分変化を求めるとある。誘導方法によりその有効性が異なる場合も

ある。要求特性の関与はカバーストーリーでおおよそは防げるが、より微小な要求特性が残ることは否めない。例えば被験者が顕在的に誘導された気分を維持するよう努力するため、気分一致方向にバイアスのかかった思考を行う。これらの効果を相殺するため適切な統制条件が不可欠であり（後述）、より意識されにくい気分誘導法の工夫が重要であろう。更に倫理的問題のため、実践上の制限がある。例えば、強い情動を生じさせることや被験者をだますことがある。実験終了後のデブリーフィングで実験目的を知らせてその理解を得る等、被験者に十分な配慮が求められる。

気分誘導法の妥当性を確認するために誘導された気分を何らかの方法で査定する必要がある。この気分評定（mood measuring）には次の3種類の方法がある。被験者に現在の気分状態を自己報告（self-report）させる方法が一般的である。その多くは気分形容詞チェックリストや性格検査について、大半がリッカート法かアナログ評定尺度を用い、現在の気分との適合度を評定させる。代表的なものに、PANAS（Positive and Negative Affect Scale; Watson, Clark, & Tellegen, 1988）、DES（Discrete Emotions Scale; Izard, 1972）、MAAC-R（Multiple Affective Adjective Checklist-Revised; Zuckerman & Lubin, 1985）、BDI（Beck Depression Inventory; Beck, Steer, & Garbin, 1988）、S-STAI（Spielberg State-Trait Anxiety Inventory; Spielberger, Gorsuch, Lushene, Vagg, & Jacobs, 1988）がある。多くの研究で用いられているが、意識の状態における査定では、被験者が推測した気分を評定する可能性がある。爽快な曲を聴いた被験者は、たとえそのような気分になってはいなくても、好ましい気分評定をしようとするかもしれない。あるいは曲そのものの好ましさを評定するかもしれない。解決策として、他の無関係な質問項目で隠すことによって気分評定だと悟られないようにする、実験終了後に実施中の気分について尋ねる、他の測定法を試みるなどが挙げられよう。そのような測定に、行動的／認知的指標（behavioral／cognitive induces）が用いられることがある。例えば、書記測度（writing speed; Clark, 1983）、文字消去（letter cancellation; Mayer & Bremer, 1985）があり、主にネガティブな気分による心理動的妨害（psychomotor retardation）を測定する方法で、被験者に気付かれにくいという利点を持つ。また、生理学的指標（psychophysiological induces）が用いられることもある。皮膚電位活動（Pecchinenda & Smith, 1996）、表情筋活動（Fridlund & Cacioppo, 1986）や、その他心拍、血圧、皮膚温度、呼吸、眼球運動等がある（Wagner & Manstead, 1989）。神経科学アプローチでは、PET等ニューロイメージングの手法も用いたものもあるが、因果関係ではなくあくまで相関にすぎないことに注意すべきであろう。実施にあたり、どの評定法を用いるのか、いつその査定を行うのかという問題がある。主観的な自己報告に加え客観的な指標を用いたり、複数の指標を取ることが望ましいだろう。

気分の個人差を基にした、ポジティブな気分とネガティブな気分との分類による自然生起気分状態（naturally occurring temporary mood states）を測度に用いた研究では⁴、様々な認知課題間でも気分一致効果が得られやすいことが指摘されている。（伊藤, 1999d; Mayer, Gaschke, Braverman, & Evans, 1992）。この方法では、被験者が感じている自然な気分状態を基に、質問紙を使って例えば抑鬱気分傾向の強い者とそうでない者に分け、このような気分状態の個人差と認知課題成績との関係を調べることになる。なおこれらの研究で用いられる質問

紙は気分評定で使われるものが代表的である。この自然生起気分を測度に用いた研究は、生態学的妥当性を持つため知見の一般化を行いやすいことや、実験室実験で捉えられない効果を扱えるメリットがある。例えば長期間に渡る感情、社会的関係性における効果、具体的には感情の生起率、感情の実際の特徴、感情の伝染を検討することができる。一方、実験的統制が低く各条件にランダムに割り振られているのか確認できないことや、因果関係が不明確であるというデメリットもある。

手続きの問題

先行研究の結果から、感情の影響を比較的受けやすい刺激材料や課題状況があることがおおよそわかっている。どのような材料の記憶が感情の影響を受けやすいか、どのような課題状況が感情の効果を生じさせやすいかを特定することは、記憶に対する感情の働きを考える上で不可欠であろう。また同時に、感情の影響が生じるような材料と課題状況とにおける気分の効果を詳細に検討することによって、その生起メカニズムを解明することも必要であろう。

刺激材料について、感情的な性質を強く持っている、多義的、経験的、よく知らない（熟知度が低い）のような検索手がかりが少ないものは、気分の影響を比較的受けやすい。感情的な性質を持っていない、一義的、辞書的、よく知っている（熟知度が高い）のような検索手がかりが豊富なものは、気分の影響を比較的受けにくい。例えばMayer & Bower (1985) は、Hasher, Rose, Zacks, Sanft, & Doren (1985) が直後再生の刺激材料として物語文章を用いたことを批判している。単語リストの代わりに文章を使ったため、効果が認められなかったに過ぎないとし、ポジティブな文とネガティブな文とが混在した文章は気分の効果の選択性を減少させると指摘した。感情的情報処理をあまり探索させないような刺激材料を用いたため、効果が認められないのかもしれない。

課題状況について、全体的な印象を尋ねたり、記銘材料が多い、偶発学習では、気分の影響を比較的受けやすい。逆に具体的判断を求めたり、記銘材料が少ない。意図学習では、気分の影響を比較的受けにくい (e.g., 谷口, 1997)。認知課題に制約があるか否かは重要な役割を果たすと考えられる。

こうして得られた結果が気分そのものの効果か否かはよく問題にされる。特に気分の効果が特定の気分状態を作り出すために用いられる気分誘導手続きに依存することがある。例えば、高揚または抑鬱的な一連の文章を被験者に読ませてそれに応じた気分状態を喚起させる Velten 法を用いた研究は多いが、被験者は文章を読む目的は高揚または抑鬱気分を誘導するためであると実際伝えられるため、これは要求特性 (demand characteristics) による効果に過ぎないと批判がある。実際 Larsen & Sinnett (1991) は、実験目的を伝えるか否かで気分の効果が異なると見出している。気分と課題との関連性に気づいている被験者は仮説を推測し、気分一致効果を示すよう加算的に実験者を助けようとする可能性がある。更に Gayle (1997) は、実験者が仮説に気づいているとそれが被験者にも伝わるので問題があるとした。しかし要求特性の効果は気分一致効果には影響しないことを示す研究もある。Mayer, Gayle, Meehan, & Haarman (1990) では判断課題の前に、その気分になるように教示した被験者でも、特に何も教示を与え

なかった被験者でも、気分一致効果のパターンは変わらなかった。非言語的気分誘導法を用いた場合、気分と課題との関連性には気づきにくいいため、気分一致効果は要求特性のみで説明されないと示唆される。とはいえ要求特性の関与を最小限に抑えるために、気分操作課題と認知課題とを別の実験者が実施する等、できるだけ実験意図を知られないよう配慮が必要であろう。

更に得られた結果が要求特性や他の要因による影響ではなく、気分の効果を反映していることを明確化するためにも、適切な統制条件を設ける必要がある。それには、気分状態が独立変数の場合におけるベースラインとしての統制群の役割と、特定の感情価を持たない中立的な記銘材料として統制刺激の役割との、2種類があるが、前者の方がより重要であろう。なぜなら先に述べた気分一致効果の定義と関わるからである。観察された気分状態間の相違が両方の状態の効果によるものか、片方の状態のそれかを明確にするべきである。例えば、ポジティブな気分とネガティブな気分を比較した場合にたとえ差があっても、それがいずれの気分のせいにあるいは両気分のせいかを特定できない。ポジティブな気分と統制条件、またネガティブな気分と統制条件を比較して初めてその効果がいずれに依存するのが明らかになる。

統制群の設定の仕方として、(a) 中立的な気分を誘導する場合と、(b) 特定の気分を誘導せず誘導群と類似する経験のみをさせる場合、(c) ランダムサンプリングにまかせる場合の3種類がある。ビデオ視聴による気分誘導法の例で言えば、(a) 穏やかな(中立的な)映像のビデオを観せることになる。しかしこの場合には中立とは何かという概念的問題が関わってくる。また(b) ビデオを観せない場合では、ビデオを観ることと特定の気分の誘導とが交絡してしまい、結果的に統制群と誘導群とで異なったパターンが得られても、それが何の効果か不明になってしまう。それゆえ(c) ビデオ視聴経験のみを与える場合が最も適当だと言えるだろう。

今後の検討すべき課題

感情が認知過程に影響を及ぼすことが広く認められるようになり、なぜこのような影響が起こるのかについて研究が進められつつある。それぞれの現象の意味を理解するためには、例えば感情の機能的な役割を問うような、適応の意味を深く追求する見方が必要であろう。このような見方から、知覚、記憶、判断のような異なる認知過程に及ぼす気分の影響を統合していく手がかりが見つかるのではないだろうか。このことは感情の働きがその規制と深く関わっていることから示唆される。

気分規制(mood regulation)とは、ネガティブな気分のときにポジティブな情報を探索することによってネガティブな気分を規制し、ネガティブな気分一致効果を除外することを指す。この気分状態を規制しようとする動機付けが気分一致効果に重要な役割を果たすことが知られている(e.g., Isen, 1987)。気分を維持する状況的制約が何もない場合、ネガティブな気分回避的な人は好ましい思考や連想を検索する等、気分状態を規制する動機づけに個人差がある(Smith & Petty, 1995)ことや、友人の訃報を聞いたときの悲しみに浸りたい気持ちのように、必ずしもネガティブな気分排除、ポジティブな気分維持とは限らず、気分規制の動機付けは文脈やその文脈における意味によって変わる(Parrott & Sabini, 1990)ことが報告されている。

このような動機付け傾向等の被験者の個人差を考慮することは近年注目を集めている。一時的な気分状態と区別して、長期継続する安定した感情特性が認知過程に及ぼす影響は、特性一致効果として従来検討されてきたが、気分と特性との統合的效果を検討することによって感情的情報処理過程を明らかにできる可能性が指摘されているためである（伊藤、投稿中; Rusting, 1998）。Mayer & Salovey (1988) は、様々な判断課題における気分一致効果を気分と特性と両方の要因を考慮する方がどちらか一方のみよりも、より強い気分の効果を見出している。

ただし特性研究では、臨床的分類や自己報告方質問紙に基づく分類に基づく相関研究が主に行われているため、得られた知見を統合する上で幾つかの注意が必要である。(a) あくまで相関であって因果関係を示すわけではない。(b) 診断的分類の基準と自己報告による評定に基づく分類とは、その目的・関心が異なるため区別すべきである。例えば抑鬱者と抑鬱傾向の高い人は異なるパフォーマンス（分離）を示す場合もある。(c) 一時的な気分から慢性的な特性へそのまま一般化できない。例えばBDIのカットオフポイントは、一度のセッションで、しかも一査定のみで行われることが多い。

本稿で取り挙げた気分の影響は極めて特殊で、日常場面の感情と比較するとかなり限定されたものと言わざるを得ない。研究しやすいという理由でポジティブな気分とネガティブな気分の2種類のみが扱われてきた。今後、感情と認知の研究を更に進めて行くためには、研究対象である感情の内容についてもっと問題とすべきである。これまで述べてきた方法論上の問題の根本に関わることとして、認知心理学において扱われてきた感情が、われわれの日常生活で経験している感情をどの程度反映しているのかという問題がある。高橋（1997）は、どれほど厳密な研究を行ったところで、その研究の中だけでしか起こらない感情を扱っている限り、それは生態学的妥当性の欠けた研究となってしまう、そのような研究から得られるものは何も無いと注意を喚起している。感情はわれわれの生活に深く関わっている。われわれは誰かから援助されて喜び、軽蔑されて怒り、裏切られて悲しみを感じる。また誰かに親切にして満足感を覚え、ののしり後悔する。このようにわれわれは他者との関わりの中でいろいろな相互作用を通じて様々な感情を感じている。感情はおおよそ対人関係の中で生じると言って良いだろう。しかし残念ながら従来感情と認知との研究においては、このような対人感情は扱われていない。われわれが日常感じている複雑な感情の情報処理について検討する以上、対人関係における相互作用と感情の生起との関係を明らかにしなければならないだろう。感情の対人関係の視点の重要性を今後の研究で実証することが望まれる。これは生態学的妥当性を克服していくような研究動向と合致すると言えよう。

脚注

1. 感情が認知に及ぼす多様な影響に基づいて、それらを説明できるような様々なモデルが提案されているが、説明理論については本稿で扱わない。
2. 特に記憶や判断における気分一致効果研究に関する詳細なレビューは、伊藤（投稿中）を参照して欲しい。
3. 詳細な手続き、気分誘導に用いる際の利点や問題点等は、高橋（1996）を参照して欲しい。
4. 本稿では気分障害者を対象とした研究は感情特性による分類とみなし区別する。

謝辞

本稿作成にあたり、平成11年科学研究費補助金特別研究員奨励費（No.9748）を受けました。また、ご指導・ご示唆を頂きました、京都大学大学院教育学研究科助教授吉川左紀子先生に厚く感謝致します。

引用文献

- Beck, A. T., Steer, R. A., & Garbin, M. G. 1988 Psychometric properties of the Beck Depression Inventory: Twenty-five years of evaluation. *Clinical Psychology Review*, 8, 77-100.
- Blaney, P. H. 1986 Affect and memory. *Psychological Bulletin*, 99, 229-246.
- Bower, G. H. 1981 Mood and memory. *American Psychologist*, 36, 129-148.
- Bower, G. H. & Mayer, J. D. 1985 Failure to replicate mood-dependent retrieval. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 23, 39-42.
- Brown, J. D. & Taylor, S. E. 1986 Affect and processing of personal information: Evidence for mood-activated self-schemata. *Journal of Experimental Social Psychology*, 22, 436-452.
- Clark, D. M. 1983 On the induction of depressed mood in the laboratory: Evaluation and comparison of the Velten and musical procedures. *Journal of Abnormal Psychology*, 91, 87-95.
- Clark, D. M. & Teasdale, J. D. 1985 Constraints on the effects of mood on memory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 1595-1608.
- Ehrlichman, H. & Halpen, J. N. 1988 Affect and memory: Effects of pleasant and unpleasant odors on retrieval of happy and unhappy memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 769-779.
- Forgas, J. P. 1995 Mood and judgement: The affect infusion model (AIM). *Psychological Bulletin*, 117, 39-66.
- Forgas, J. P. & Bower, G. H. 1987 Mood effects on person-perception judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 53-60.
- Forgas, J. P., Bower, G. H., & Krantz, S. E. 1984 The influence of mood on perceptions of social interactions. *Journal of Experimental Social Psychology*, 20, 497-513.
- Fridlund, A. J. & Cacioppo, J. T. 1986 Guidelines for human electromyographic research. *Psychophysiology*, 23, 567-589.
- Gayle, M. C. 1997 Mood-congruency in recall: The potential effects of arousal. *Journal of Social Behavior and Personality*, 12, 471-480.
- Gerrig, R. J. & Bower, G. H. 1982 Emotional influences on word recognition. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 19, 197-200.
- Gotlib, I. H. & McCann, C. D. 1984 Construct accessibility and depression: An examination of cognitive and affective factors. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 427-439.
- Gross, J. J. & Revenson, R. W. 1995 Emotion elicitation using films. *Cognition and Emotion*, 9, 87-108.
- Hasher, L., Rose, K. C., Zacks, R. T., Sanft, P., & Doren, B. 1985 Mood, recall and selectivity effects in normal college students. *Journal of Experimental Psychology: General*, 114, 104-118.
- 池上知子 1997 第5章 社会的判断と感情 海保博之編 「温かい認知」の心理学 Pp.99-119.

- 池上知子 1998 社会的認知と感情 山本眞理子・外山みどり(編) 社会的認知 誠信書房 Pp.77-101.
- Isen, A. M. 1987 Positive affect, cognitive processes, and social behavior. *Advances in experimental social psychology*, 20. Academic Press, 203-253.
- Isen, A. M., Shalcker, T. E., Clark, M., & Karp, L. 1978 Affect, accessibility of material in memory, and behavior: A cognitive loop? *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 1-12.
- 伊藤美加 1998 異なる評価を持つ友人関連判断における気分の効果 日本心理学会第62回大会発表論文集, 864。
- 伊藤美加 1999a 自動的処理と統制的処理における気分の影響 日本心理学会第63回大会発表論文集, 563。
- 伊藤美加 1999b 自己・他者に対して生じた感情が語幹完成・印象形成課題に及ぼす影響 日本感情心理学会第7回大会発表論文集
- 伊藤美加 1999c 気分一致効果の生起要因について 京都大学教育学研究科紀要 第45号 237-249。
- 伊藤美加 1999d 自然に生じた気分状態における気分一致効果 日本教育心理学会第41回大会発表論文集, 279。
- 伊藤美加 印刷中 自己関連の情報処理における気分一致効果 - 自伝想起課題による検討 心理学研究。
- 伊藤美加 投稿中 気分一致効果を巡る諸問題 - 気分状態と感情特性 -
- Izard, C.E. 1972 *Patterns of emotions: A new analysis of anxiety and depression*. New York: Academic Press.
- Kwiatkowski, S. & Parkinson, S. R. 1994 Depression, elaboration, and mood-congruence: Difference between natural and induced mood. *Memory and Cognition*, 22, 225-233.
- Laird, L. D., Cuniff, M., Sheehan, K., Shulman, D., & Strum, G. 1991 Emotion specific effects of facial expressions on memory for life events. *Journal of Social Behavior and Personality*, 4, 87-98.
- Larsen, R. J. & Sinnett, L. M. 1991 Meta-analysis of experimental manipulations: Some factors affecting the Velten mood induction procedure. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17, 323-334.
- MacLeod, C. & Rutherford, E. M. 1992 Anxiety and the selective processing of emotional information: Mediating roles of awareness, trait and state variables, and personality relevance of stimulus materials. *Behavior Research and Therapy*, 30, 479-491.
- Mayer, J. D. & Bremer, D. 1985 Assessing mood with affect-sensitive task. *Journal of Personality and Assessment*, 49, 95-99.
- Mayer, J. D. & Bower, G. H. 1985 Naturally occurring mood and learning: Comment on Hasher, Rose, Zack, Sanft, and Doren. *Journal of Experimental Psychology: General*, 119, 396-403.
- Mayer, J.D., Gaschke, Y.N., Braverman, D.L., & Evans, T.W. 1992 Mood-congruent judgement is a general effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 119-132.
- Mayer, J. D., Gayle, M., Meehan, M. E., & Haarman, A. 1990 Toward better specification of the mood-congruency effect in recall. *Journal of Experimental Social Psychology*, 26, 465-480.
- Mayer, J. D. & Salovey, P. 1988 Personality moderates the interaction of mood and cognition. In K.Fiedler & J.P.Forgas (Eds.), *Affect, cognition, and social behavior*, Pp.87-99, Tronto, Ontario, Canada: Hogrefe.
- Nasby, W. 1994 Moderators of mood-congruent encoding: Self-/other-reference and affirm-

- ative/non-affirmative judgment. *Cognition and Emotion*, **8**, 259-278.
- Nasby, W. 1996 Moderators of mood-congruent encoding and judgment: Evidence that elated and depressed moods implicate distinct processes. *Cognition and Emotion*, **10**, 361-377.
- Niedenthal, P. M. & Setterlund, M. B. 1994 Emotion congruence in perception. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **20**, 401-411.
- Niedenthal, P. M., Halberstadt, & Setterlund, M. B. 1997 Being happy and seeing "happy" : Emotional state mediates visual word recognition. *Cognition and Emotion*, **11**, 403-432.
- Parrott, W. G. & Sabini, P. 1990 Mood and memory under natural conditions: Evidence for mood in congruent recall. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 321-336.
- Pecchinenda, A. & Smith, C. A. 1996 The affective significance of skin conductance activity during a difficult problem-solving task. *Cognition and Emotion*, **10**, 481-503.
- Rinck, M., Glowalla, U., & Schneider, K. 1992 Mood-congruent and mood-incongruent learning. *Memory & Cognition*, **20**, 29-39.
- Rusting, C. L. 1998 Personality, mood, and cognitive processing of emotional information: Three conceptual frameworks. *Psychological Bulletin*, **124**, 165-196.
- Schwarz, N. 1990 Feelings as information: Informational and motivational functions of affective states. In E.T.Higgins & R.M.Sorrentino (Eds.), *Handbook of motivation and cognition: Foundations of social behaviour*, Vol.2. New York: The Guilford Press. Pp. 527-561.
- Schwarz, N. & Clore, G. L. 1983 Mood, misattribution, and judgements of well-being: Informative and directive functions of affective states. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 513-523.
- Smith, S. M. & Petty, R. E. 1995 Personality moderators of mood congruency effects on cognition: The role of self-esteem and negative mood regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 1092-1107.
- Spielberger, C.D., Gorsuch, R.L., Lushene, R., Vagg, P.R., & Jacobs, G.A. 1983 *Manual for the state-trait anxiety inventory (form Y)*, Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- 高橋雅延 1996 記憶と感情の実験的研究の問題点 聖心女子大学論集, **86**, 61-102.
- 高橋雅延 1997 悲しみの認知心理学—気分と記憶の関係— 松井豊編 悲嘆の心理 サイエンス社 Pp.52-82。
- 谷口高士 1997 第3章 記憶・学習と感情 海保博之編 「温かい認知」の心理学 Pp.53-75。
- 筒井美加 1997a 自己関連語における気分一致効果 心理学研究, **68**, 25-35。
- 筒井美加 1997b 自己関連判断と他者関連判断における気分の影響の違い 日本心理学会第61回大会 発表論文集, 77。
- Velten, 1968 A laboratory task for the induction of mood states. *Behavior Research and Therapy*, **6**, 473-482.
- Wagner, H.L. & Manstead, A. (Eds.) 1989 *Handbook of social psychophysiology*. Chichester: Wiley.
- Zuckerman, M. & Lubin, B. 1985 *Manual for the multiple affective checklist-revised*. San Diego, CA: Edits.
- Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. 1988 Development and validation of brief measures of positive and negative affects: The PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 1063-1070.

(日本学術振興会 特別研究員, 博士後期課程2回生, 教育認知心理学講座)